

あらたなフロンティアとの出会い - 東ティモールを旅して

乾燥地といえば寒冷な高緯度帯である極圏や高山帯とならんで地球上のフロンティアのひとつであろう。そこは耕作限界であり、伝統的には粗放な牧畜のみが成立する場であった。このような限界地域に展開する牧畜は貧困解消や生活改善の側面での開発対象にとどまらず、こんごの世界の食糧生産を考えるに際してもっと積極的に重要な示唆をあたえているようにおもわれる。乾燥地ないし高山帯でおこなわれる放牧は、人が利用できない草資源を家畜の能力を利用し人間の食料に変換するという機能をもっている。このような観点から、食用穀物をめぐる人と家畜の競合は深刻な食糧争奪に陥ろうしている昨今の世界にあって、乾燥地牧畜の開発は将来の持続的かつ安定的な食糧生産のなかでみなおされていくのではないか。それは、高齢化や離村化による急速な過疎化や耕作放棄がすすみ疲弊するわが国の農村・山村の状況にもあい通じるところがある。山岳国・日本において人が住めなくなった山間傾斜地をどのように再利用していくのか。限界地域(マージナル)の有効利用、これはわれわれに課せられた重大なテーマのひとつであると考えている。

ところで、海外において乾燥地にどっぷりつかってきたわたしにとって熱帯畜産はちょっと縁遠い世界であった。学生時代に専攻した温帯の寒地型牧草、その後中東を中心に乾燥地畜産の業務を経験してきたわたしにとって、熱帯・亜熱帯の暖地型牧草にじかに接する機会はなかなか訪れなかった。国際協力の分野の身近な先輩方のなかには熱帯畜産を専門に活躍する人もいて、そんな人たちのみやげ話をうらやましくも聞くのみであった。しかし、ようやく2度ほど東ティモールを調査する機会を得た。ついにわたしも熱帯畜産の世界にあしを踏みいれることになったわけである。

独立をはたしたものの東ティモールはいぜん不安定な政治・経済状況下におかれており、まだまだ前途多難なものを感じさせたが、国の歴史はあさくとも若々しく前進しようとする東ティモールの人々の歩みにおもいはせずにはいられない。しかし、今回はなんといつてもはじめてまのあたりにする熱帯の自然が想像をこえて魅力に富む世界として鮮烈にわたしの視野へととびこんできた。乾季と雨季をくりかえす気候条件、激しい降雨、表土流亡した赤褐色の土壌、焼畑と移動耕作、紺碧の海にかこまれた漁港と路傍でにぎわう魚市場、熱帯果実のとりどりにヤシ酒の酩酊、そして山岳内部にすむ素朴なおもかげを色濃くのこし、伝統的な生活様式を堅守する住民たち。これまでとんと縁がなかった熱帯の一つひとつが強力なかがやきをもってわたしをひきつけた。

畜産分野に目をむけると、東ティモールの家畜は儀礼用あるいは文字どおり livestock の財として飼養されていることに気づく。ウシは富裕層のステータス・シンボルとして、またヤギ・ブタなどの小型家畜は儀礼用の犠牲獣としてあつかわれる。また家畜は貴重なタンパク質源であるとともに、容易な換金源としても重要である。住民にしてみたら、たえず不安定な降雨や干ばつの中でおこなわれる焼畑での作物生産が内包する危険性を分散させる保険として家畜をみだてしているとも考えられる。他方、貧栄養な土壌で生育する草本類は乾季にはいるとひじょうに粗剛になる。低栄養飼料による家畜の慢性疾患や事故死亡もここでは改善すべき点として指摘されるであろう。さらに放牧地に拡散した強害雑草は有用草を被覆・枯死させ放牧利用の阻害要因としてやっかいな問題となっていた。さまざまに興味ぶかくも今回の旅では短期間でふれたにすぎないが、熱帯圏で明瞭な乾燥・雨季にくぎられる山岳国・東ティモールはわたしにとってまちがいなく地球上のあらたなフロンティアとなった。

(2008年5月 古賀)



市場のにぎわい



立ちのぼる焼畑の煙水



浴する水牛の群れ